

農業女性の自立について

うえ の かなえ
上 野 カナエ

私は53歳、33年間農業に携わってきた。夫と一緒に専業農家としての自立を目指して、悪戦苦闘をしてきたといっても過言ではない。昔から営々とやってきた農業ではあったが、夫の家が大きな落とし穴に落ち込んでいた時期、私達は結婚した。多額の借金や土地の流動を防ぐために、生産以外の面でも大きな苦勞を背負い込んでの出発であった。私達が原因を作った訳でもないのにこんな苦勞を最初から抱え込み、今でもあの時逃げ出していたら、私の人生変わっていたかもと思う事がある。

夫の夢であった自立した農業、職業として捉えた農業を目指して過ぎた月日は、今振り返れば快い苦勞だったとも思われる。4人の子供を農業の生業の中で育てたことも良かったと思っている。養豚、稲作、果樹、花とフル活動の私達の働きを見て育った長男が、大学を終わった時私達に言った。「仕送りもなくなるんだし、養豚はやめたら？りんご園を整備しておいてくれたら10年後に家に入るよ」と。後継者になってくれると言われ、私達は感動した。私達が必死で生きてきた事を最も身近な人に認められたのだ。

早速我家の経営の見直しを図る事にした。70年にもなるりんごの古木を切り、南東傾斜の陽当たりのいい園地を整備した。水田の畦を取り、りんご園地に造成し直した。私達が守り通したこの土地が更に素晴らしい景観のりんご園に生まれ変わった。後継者に渡すまでの10年間、私達の集大成にしようと植えたワイ化りんごは1700本、16種類、9月から11月まで品種ごとに収穫出来る。春は花に埋まり、秋は真赤なりんごがたわわに揺れる。

こんなりんご園を私は一人でみているのがもったいなくなった。りんご畑を覗いてみた

い、さわってみたい、そんな人達に我家に気楽に出入りして貰えたらいいな。いろいろ考えた結果、りんごの木のオーナーになって貰い、我家の「りんご家族」として一年中我家を実家のように気楽に出入り出来る方法を考えて。

古い作業所を改造し、気楽に休める休息所「御慮里（ごろり）庵」を作った。会員制にしてオーナーの交流やお楽しみ会などに使える様工夫した。車イスも出入り出来るトイレを作り、今園地の中も入れる小道を作ろうと思案中である。

りんご専業の中で三つの部門経営を展開していく計画がやっと動き出した。従来からの顧客から注文を戴く贈答用部門、近くの直売所で販売する部門、そしてオーナー制を含めた観光部門。

平成10年6月、私は夫と経営協定を結んだ。観光部門の担当、給料制にする事、休日を設ける事などを盛り込み、私も一人前の農業者として位置付けがされた証である。30数年上野家で過ごした私の人生、何か得るものがあったかと聞かれた時、胸を張って言いたい。私もいたから成り立ってきたと自負したい。

女性が主張しようとするときまだいろんな壁がある。それが古い地域性だったり、同性からのものだったり、理屈に合わない事も多い。経営協定一つとっても回りでやっている人は少ない。否定的な意見もある。女性の自立には効果はあるが、男性にとってはそう必要な訳ではないらしい。私の夫も土地の名義や所得の分配の話をした時、「家の中も外も仕事もお前の自由にしているんだからいいじゃないか」という意見だった。確実なものや形もあっていい位、協力してきた私の気持ちとは少しかけ離れていた。男性の意識を変えていく事が重要だと私は思った。村の農業委員の選挙が来月ある。まだまだ女性の進出には程遠い雰囲気ではあるが、意見をいえる学習は積んでおくべきだと考えているこの頃である。

(岩手県滝沢村・農業)